

偶評
今體夕

特279-296



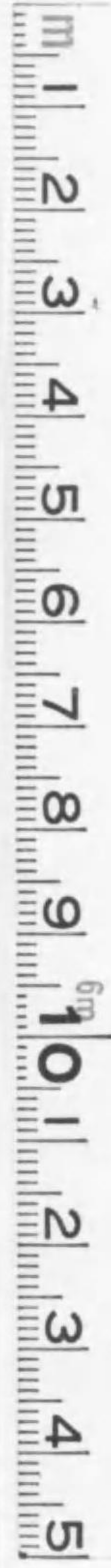
1200501132274

f279

296



共三本



始



特 279
296

東京大学
文学部
国文学科
蔵

UNIVERSITY OF TOKYO

偶評

今體名家文鈔

明治十年圖書局發行

明 治 十 年
三 月 十 日
春 屋 開 殿
故 事

相國公
其樂也而

推例一
之智勇

開拓萬古

之心胸

明治丁丑秋

後三日

一与五古十候題



今體名家文抄題辭
偶評今體名家文抄序
韓柳歐蘇曾王乃文妙小則妙矣而
一其言小所心今日此形勢事
情小適多矣孫爾義臧勃克留の論
快之則快矣而一其文字小則橫
行蟹文觀覽此便了供多矣故余
常に、韓、柳、歐、蘇、曾、王、の筆を傳ひ
以て孫、爾、義、臧、勃、克、留、の文を譯

偶評今體名家文抄序
韓柳歐蘇曾王乃文妙小則妙矣而
一其言小所心今日此形勢事
情小適多矣孫爾義臧勃克留の論
快之則快矣而一其文字小則橫
行蟹文觀覽此便了供多矣故余
常に、韓、柳、歐、蘇、曾、王、の筆を傳ひ
以て孫、爾、義、臧、勃、克、留、の文を譯

述——所謂一世乃智勇哉推倒——
萬古乃心胃字開拓と欲する也
久——此間閑居無聊、架上此書冊故
乱抽——本に任まると披閱流覽の際、
會心適意此處あると、小案と拍て快
と叫ひ、手拍と拍て快と叫ぶ、其叫ぶ
處を呼ぶと交、真小案と拍て之と批し、
これと評し、日此善れ、夜乃思ふこと哉

知らず、其快實に精神と九原乃
底——呼起——彌尔、義減、勃克留、
夕——ブルと同ふ——其論説と書取ら
——むるを、是に過ぎん——を、まき、
想像せしめ、身ら余の希願と信了、
斯のめきと凡半月餘、不覺鳴世近
人此文三百余篇と得る、名つけを
偶評今體名家文抄といふた、

書肆内藤氏此甲府より来るに會て
計る様に上し、江湖同存此士より分
たんとす、因て重く之を閲する、嚮小
妙と呼び、快く叫ぶ之を拙し之を
評する、處法に國家此忌諱了觸
るる、ちち何れも出版條例に抵るも此
あれ、彼乃差支る、割る、是の不都合
哉、除き、僅に五十餘篇、此少き、至ん

は、此編存する所、今之余の得意此文
辭、此より、悦ぶといつとも、之を唐宋
ハ大家及び文章軌範等、此譯解を
刻するも、此に比する、此聊、世人の心目
を快活し、諸生作文、此助、之より、も
お、家々、此、決意、此、抄、之、書、肆、復
来、之、從、之、は、其、亦、之、に、付、其、意
不、悔、之、務、を、り、不、忘、我、邦、今日、乃

弥甫、義減、勃克、留氏、余の、妄批、島評、
候、快、く、相、答、る、事、多、く、多、く、多、く、也、
明治十年 第一月

一品花橋之人、去居先華、感

得可き人書 頓

偶評 今體名家文抄目錄

卷之一

一 全國一致ノ体ヲ論ズルノ議 大隈重信
六 民選議院設立ノ建言 副島種臣

十二 位階並歳俸條例ノ議 伊地知正治

十五 歐洲ヨリ歸リ言ヲ述ルノ書 木戸孝允

廿三 盲啞學校ヲ創建セシムルヲ乞フノ書 山尾庸三

農業三事ヲ上ルノ書

津田 仙

木戸參議ニ上ルノ書

何 禮之

卷之二三

自由交易論

西村茂樹

政府與人民異利害論

全 野

自主ノ權ハ自主ノ志行ヨリ起ル論

中村正直

賞罰毀譽ノ論

全 野

愛敵論

西 周

内地旅行論

津田真道

人材論

全

妻妾論

森 有禮

男女同數論

福澤諭吉

夫婦同權ノ流弊論

加藤弘之

民選議院ノ時未ダ至ラザル論

神田孝平

駁舊相公議一題

西 周

西洋開化西行スル説

津田真道

保護税ヲ非トスル説

全

人民ノ性質ヲ改造スル説

中村正直

情實ノ説

西 周

煉化石造ノ説

西 周

人ニ貴賤貧富ノ別ナキ説

福澤諭吉

開化ノ進ムハ政府ニ曰ラズ人民ノ衆議ニ因ル説

箕作麟祥

卷之四五

萬法精理序

木戸孝允

比斯馬爾克傳序

全

江月齋遺集序

全

英國議院章程序

全

斯氏農書序

大久保利通

英國議院章程序

伊藤博文

北支那戦争記序

大隈重信

商家必携序

前島 密

輿地新圖序

秋月種樹

童蒙教草序

福澤諭吉

學問ノ勸第二編端書

全

輿地新圖序

西村茂樹

校正萬國史略序

全

泰西史鑑中編序

全

自助論第一編序

中村正直

自助論第二編序

中村正直

全書第四編序

全

全書第八編序

全

全書第九編序

全

自由之理序

全

民選議院論綱序

全

古今萬國綱鑑錄序

全

農業三事序

全

泰西史鑑序

依田百川

近世史略序

川田剛

通計文五十一首

目錄終

Blank columns for text on the right page.

偶今禮名家文抄卷之一

土居光華編選

通書

全圖

全國一致ノ体ヲ論スル議

大隈重信

通篇ノ大意先ツ此ノ三句ヲ掲ケテ明示シ然ル後反覆論辨抑揚變化自ラ古人ノ法ニ合フ一致ノ二字所謂一篇ノ骨

夫レ建國立法ノ体各國土俗風習ノ異ナルアリト雖氏其國ヲ守リ其民ヲ護シ自主ノ權カヲ以テ獨立不羈ノ威柄ヲ備ヘ萬邦ト並立シテ對等ノ交際ヲ遂ル者其國ハ一致ヨリ出ザル者ナシ蓋シ國ハ其民ト共ニ守ル者ニシテ政府ハ其守

衛保護ヲ任スル者ナリ、故ニ其全國ノ租税ヲ集メ、以テ守衛保護ノ費ニ供ス、即帝家政府軍備及ヒ外國交際一切ノ費用ニ充ルハ、是普通ノ公理ニシテ、國權一ニ歸シ、國力共ニ合シ、國威隨テ伸ルヲ得、是レ國ノ國タル所以ナリ、故ニ其政府タルヤ、專權私制ノ弊ナク、公明正大ノ理ニ体スヘシ、是ヲ以テ自主ノ權人民ニ足テ、自衛ノ威國家ニ備ハル、是レ政府タル所以ナリ、而シテ其國ノ國タル所以、其政府ノ政府タル所以、唯其上下一致、自主ノ權ヲ有シ、偏狹自私ノ陋習ナク、忠孝

惻怛ノ至誠アツテ、共ニ其國ヲ愛スルノ實アルヨリ、根抵シテ成就スル所ナリ、此レ豈專擅ノ政治ニシテ、能ク然ヲ得ンヤ、我中古皇綱紐ヲ解キシヨリ、政權一ニ武門ニ歸シ、郡縣ノ制變シテ封建ノ勢ヲナシ、勢力相軌リ、兵威相奪ヒ、其間復倫紀綱常ノ觀ルベキ者ナシ、霸者跡ヲ接シテ、歷世專擅ノ政治トナリ、王命ヲ奉シテ諸侯ヲ督スト雖氏、大道明義名アツテ實ナシ、習慣ノ久シキ、藩屏ノ侯伯、國各政刑アリ、其臣民唯其封内ヲ以テ自國トシ、或ハ甚シキハ他州ヲ仇視スルニ至リ、

一家胡越ノ情狀ヲナシ、全國ノ氣脈、阻梗シテ通
セズ、殆ト四分五裂ノ勢ニ至リ、王憲振ハズ、霸政
日ニ衰ヘ、李世澆薄、因循風ヲナシ、推數詐術、僅ニ
一時ヲ調護スルニ過ズ、遂ニ海外諸州、締交互市
ノ道開カザルヲ得ザルノ運ニ際會ス、是ヲ以テ
人心乖戾シ、國是定ラズ、物論昇沸シ、紛紜止マズ、
因テ多ク國家ノ損害ヲ招ケリ、此皆霸政專擅ノ
餘弊ニシテ、自主ノ國權確立セザル所以ナリ、而
ノ天其衰ヲ誘ヒ、皇威再ビ煥發中興偉業ノ盛シ
ナルヲ見ルニ至レリ、是ニ於テ侯伯其私有ノ土

地人民ヲ奉還シ、全國漸ク郡縣ノ体ニ歸シ、其國
ノ守衛、其民ノ保護、皆皇上ト、其政府トノ委任ス
ル所トナリ、前日煥散セシ國權ヲ確立シ、分離セ
シ國カヲ合併シ、一致ノ政体ヲ立テ、其守衛保護
ノ道ヲ、盡サザルヲ得ザルノ、責ニ任セリ、而シテ
其人民ヲ奉還セシ各藩、此運ニ會シ、名ヲ正シ、實
ヲ明ニシ、毫モ私營スル所ナク、勉テ一致ノ体ヲ
賛成シ、國ヲ愛スル誠ヲ表シ、協同以テ皇國ヲ維
持スルヲ、遂ゲザル可カラスノ理ニ任セリ、夫海
陸兵制ハ、更張セザル、一致ノ体ニ非ザルナリ、廢

一致ノ字重
皆熟讀下シ
得テ妙古文
往々此法ア
リ習文者宜
シク注意ス
ベシ容易ニ
讀過スベカ
ラス
故ニ海陸兵制
云々以下文
等潮ノ如シ

務百事ハ振興セザル、一致ハ体ニ非ザルナリ、財
制會計ハ均一ナラザル、一致ハ体ニ非ザルナリ、
凡此數ノ者、皆一致ニ帰スル、建國ノ大体ニシテ、
立法ノ綱維タリ、故ニ海陸兵制ハ更張セザル、國
ハ守衛ヲ任スルニ足ラズ、庶務百事ハ振興セザ
ル、民ハ保護ヲ任スルニ足ラズ、財政會計ハ均一
ナラザル、此ヲ更張セシメ振興セシムル費用ニ
供スルニ足ラズ、今各藩ノ所見、協同和合以テ一
致ノ政体ヲ期シ、帝王ヲ奉シ、此國家ヲ維持セン
トスルニアリ、更ニ其大体ヲ立テズ、猶此三不足

救東照應法
アリ

アルヲ存ス、豈能ク其政ヲ舉ルヲ期スベケンヤ、
夫レ全國ノ高三千万石ニ過ギズ、而シテ府縣ノ
管轄スル所ハ、八百万石トス、其二千二百万石ハ、
各藩ノ管轄タリ、此數ヲ公算シテ、全國守衛保護
會計ノ標準トシ、能ク之ヲ按算セズンバ、兵制何
ニ由テ振興スルヲ得ンヤ、兵制立ズンバ、國權何
ニ因テ立ン、國權立ザレハ、何ノ時カ獨立不羈ノ
威柄ヲ備ヘ、萬邦ト並立シテ、對等ノ交際ヲ遂ル
ヲ得ンヤ、夫政府盡サハルヲ得ザルハ、責ニ任シ
テ、其實ヲ問ハズ、各藩遂ゲザルベカラザルハ、理

アツテ、其實ヲ舉ゲズ、各相顧望猶豫シテ、大ニ有
為ハ秋ヲ誤ラバ、國權ハ確立スル、又更ニ何時ヲ
期セシヤ、今國內維渙兮ノ運ニ際シ、外國推理勢
歴ノ交際ニ接ス、銳意經營、宜シク皇暇ナカルベ
キヲ、顧望猶豫尚、此ノ如シ、後世ノ遺憾豈窮極ア
ランヤ、然ラバ則政府其實ヲ問ハザルベカラズ、
各藩其實ヲ舉ザルベカラズ、何ヲ其實ヲ舉ルト
云フ、各管轄ノ兵ヲ一致シ、兵部ニ屬スル是ナリ、
庶務百事ヲ一致シテ、民部ニ屬スル是ナリ、財政
會計ヲ一致シテ、大藏ニ屬スル是ナリ、此レ其實

建議定白ノ
書中必ス此
一段處置方
法ノ処ナカ
ルベカラズ
一致ノ字愈
出テ愈妙

ヲ舉ル所以ニシテ、其是ヲ更張振興セシムルノ
基礎、只財政ノ一致ニ在ルナリ、故ニ舊政ヲ革メ
弊事ヲ去リ、無用不急ノ秩祿ヲ削リ、墾土浮民ナ
カラシメ、用ヲ節シ、費ヲ省キ、其會計ヲ公算シ、政
府ニ供セザルベカラズ、政府亦洵ニ此寄ヲ任ス
ルヤ、其財政固ヨリ國ヲ守リ、民ヲ護スルノ公費
ニシテ、毫モ專擅スル餘ハズ、公明正大ノ理ニ体
ン、自主ノ權、人民ニ足り、自衛ノ威ヲ國家ニ備ヘ
シム、夫レ如此ニシテ、政体一致、建國立法ハ大抵
綱領ヲ得タリト云フヘク、國カ合シ、國權立ト云

若シ海陸云々反振ノ法ヲ用井筆勢嬌々談論文ノ妙境

結末此処猶一致ノ字ヲ用井テ漏サズ收束法ヲ得タリト云フベシ

ハベキナリ、若シ海陸兵制之ヲ更張スル能ハズ、庶務百事之ヲ振興スル能ハズ、財政會計之ヲ均一ナラシムル能ハズ、僅ニ八百万石ノ租税ヲ以テ、全國務上、一切ノ用度、及ビ兵制外務、交際ノ所費ニ供ス。此レ前日ノ舊ト、更ニ相異ナルトナクシテ、其國其政府タル所以ヲ得ザル所以ナリ、願クハ速ニ全國財政ノ公算ヲ定メ、真ニ全國一致ノ体ヲ立テ、全國ノ権カヲシテ自主自衛ニ足ラシメ、萬邦對等ノ獨立不羈國タラシテ、今日衆議公定セザルベカラズ、某年某月日參議大隈重信頓

首再拜謹言

民選議院設立ノ建言

副島種彦

後藤象次郎

板垣退助

臣等伏テ方今政權ハ歸スル所ヲ察スルニ、上ニ帝室ニ在ラズ、下モ人民ニ在ラズ、而シテ獨リ有司ニ歸ス。夫レ有司上ニ帝室ヲ尊ブト曰ハガハルニ非ズ、而シテ帝室漸ク其尊榮ヲ失ヒ、下モ人民ヲ保ツト云ハガハルニ非ズ、而シテ政令百端朝出暮改、政刑情實ニ成リ、賞罰愛憎ニ出ズ、言路壅蔽

起手直二本意ヲ吐露セズ、讀者ラシテ或ハ恐怖シテ或ハ驚愕其意ヲ測セザラシム亦是一格隱々雷声南山ノ陽ニ在ルニ似タリ

唯天下公議
云々ハ驟雨
雨三点屋上
ニ灑クカ如
ク而シテ天
下ノ公議ヲ
張ルハ民選
議院ヲ立ル
云々ハ驟雨
ノ大ニ至ル
カ如クニシ
テ讀者此ニ

困告告ルハシ夫レ是ハ如クニシテ天下ハ治安
ナラシムル欲ス三尺ハ童子モ猶其不可ナルヲ知
ル。因循改メズ恐ハ國家土崩ハ勢ヲ致サン。臣
等愛國ノ情自ラ已ム能ハス。乃チ之ヲ振救スル
ノ道ヲ講求スルニ唯天下ノ公議ヲ張ルニアリ。
而シテ天下ノ公議ヲ張ルハ民選議院ヲ立ルニ
在ル。則チ有司ノ權限ル所アツテ而シテ上
下安全。其幸福ヲ受ル者アラン。請遂ニ之ヲ陳セ
ニ。夫レ人民政府ニ對シ租稅ヲ拂フノ義務アル
者ハ。則其政府ノ事ヲ與知可否スルノ權理ヲ有

至テ始テ彼
ノ陰々ノ雷
ハ是レ此驟
雨ノ為ナル
ヲ知ル

ス。是レ天下ノ通論ニシテ復喋々臣等ノ之ヲ贅
言スルヲ待ザルナリ。故ニ臣等竊ニ願フ有司モ
亦是ノ大理ニ抗抵セザラン。今民選議院ヲ
立ルノ議ヲ拒ム者曰ク。我民不學無識未ダ開明
ノ域ニ進マズ。故ニ今日民選議院ヲ立ツル尚ホ
應ニ早カル可シト。臣等以為ラク。若シ果シテ其
謂フ所ノ如キカ。則之ヲシテ學且智ニシテ急ニ
開明ノ域ニ進マシムルノ道。即民選議院ヲ立ツ
ルニ在リ。何トナレバ。則今日我人民ヲシテ學且
智ニ開明ノ域ニ進マシメントスルハ。先其通義

權理ヲ保有セシメ、之ヲシテ自尊自重天下ト憂
樂ヲ共ニスルノ氣象ヲ起サシメザル可ラズ、自
尊自重天下ト憂樂ヲ共ニスルノ氣象ヲ起サシ
メントスレバ、之ヲシテ天下ノ事ニ與ラシムル
ニ在リ、是ノ如クニシテ人民其固陋ニ安ンジ、不
學無識自カラ甘ンズル者ハ、未ダ之レアラザル
ナリ、而シテ今其自ラ學且智ニシテ、自カラ其開
明ノ域ニ入ルヲ待ツ、是レ殆ンド百年河清ヲ待
ツノ類ナリ、甚シキハ、則今遽ニ議院ヲ立ルハ天
下ノ愚ヲ集ムルニ過ザルノミト謂ニ至ル、噫何

ゾ自ラ傲ルハ太甚シクシテ、其人民ヲ視ルハ蔑
如タルヤ、有司中智巧固ヨリ人ニ過タル者アラ
ン、然ニ世復安ゾ學問識見ハ諸人ニ過グル者ア
ラザルヲ知ラシヤ、蓋シ天下ノ人は是ハ如ク蔑視
ス可ラサルナリ、若シ果シテ蔑視スベキ者トセ
バ、有司モ亦其愚中ノ一人ナラズヤ、然ラバ、則均
ク是レ不學無識ナリ、僅々有司ノ專裁ト、人民ノ
輿論公議ヲ張ルト、其賢愚果テ如何ゾヤ、臣等謂
フ、有司ノ智モ亦之ヲ維新以前ニ視ル、必ス其進
ミシ者アラン、何トナレバ、則人間ノ智識ナル者

以上天下ノ
大理ニ就テ
之ヲ究ハメ
今日ノ勢ニ
就テ之ヲ
論ス

必ズ其之ヲ用ルニ從テ進ム者ナレバナリ。故ニ
曰ク、民選議院ヲ立ルハ、是レ即人民ヲシテ學且
智ニシテ急ニ開明ノ域ニ進マシムルノ道ナリ。
ト。且ツ夫レ政府ノ職其宜ク奉シテ以テ目的ト
ナスベキ者。人民ヲシテ進歩スルヲ得セシムル
ニ在リ。故ニ草昧ノ世、野蠻ノ俗、其民勇猛暴悍、而
シテ從フ所ヲ知ラズ、是時ニ方ツテ政府ノ職、固
ヨリ之ヲシテ從フ所ヲ知ラシムルニ在リ。今我
國既ニ草昧ニ非ズ、而シテ我人民ノ從馴ナル者、
既ニ過甚トス。然ラバ、則今日我政府ノ宜ク以テ

以上政府ノ
職ニ就テ論ス

其目的トナス可キ者ハ、則我人民ヲシテ其固有
勇前敢爲ノ氣ヲ起シ、以テ天下ヲ分任スルノ義
務ヲ辨知擔當セシムルニ在リ。而シテ是レ唯先
ツ民選議院ヲ立テ、其ヲシテ天下ノ事ニ參與ス
ルヲ習ハシメ、而シテ后始テ能ク其效ヲ見ル可
キ也。夫レ政府ノ強キ者、何ヲ以テ力之ヲ致スヤ。
天下人民皆同心ナレバナリ。臣等必ズ遠ク舊事
ヲ引テ之ヲ證ヒズ。且ツ昨十月政府ハ變革ニ就
テ之ヲ驗ス。爰々乎其危哉。我政府ハ孤立スルヤ。
何ゾヤ。昨冬我政府ノ變革、天下人民之ガ爲ニ喜

以上十月政
府ノ変革ニ
就テ論ズ
總收整々猶
名將ノ軍ヲ
麾シ兵ヲ收
ルガ如シ大
文字ヲ作ル
者此法ヲ知
ザルベカラズ

威セシ者幾バクカアル。帝之ガ爲メニ喜戚セザ
ルノミナラズ。天下人民ノ漠トシテ之ヲ知ラザ
ル者十ノ八九ニ居レリ。唯兵隊ノ解散ニ驚クノ
ミ。今民選議院ヲ立ルハ、則政府人民ノ間情實融
通相共ニ合シテ一体トナリ。國始メテ以テ強カ
ルベク。政府始テ以テ強カルベキナリ。臣等既ニ
天下ハ大理ニ就テ之ヲ究ハメ、我國今日ハ勢ニ
就テ之ヲ實ニシ。政府ハ職ニ就テ之ヲ論シ。及ビ
昨十月政府ハ變革ニ就テ之ヲ驗ス。而シテ臣等
ハ自ラ臣等ハ説ヲ信スルト愈篤ク切ニ謂フ今

但臣等云々
ト説起シ下
段ノ過渡ヲ
ナス收テカ
ヲ費サズ所
謂一意ヲ生
カル法ニシ
テ是亦長篇
大作ノ手段
古人此等ノ
妙處ヲ評シ

日天下ヲ維持振起スルノ道。唯民選議院ヲ立テ
而シテ天下ノ公議ヲ張ルニ在ル而已ト。其方法
等ノ議ノ如キハ、臣等必ズ之ヲ茲ニ言セズ。蓋シ
十數枚紙ノ能ク之ヲ盡ス者ニ非レバナリ。但臣
等竊ニ聞ク今日有司持重ノ説ニ藉リ、事多ク困
循ヲ務メ、世ノ改革ヲ言フ者ヲ目シテ、輕々進歩
トシ、而シテ之ヲ拒ムニ尚。早キノ二字ヲ以テス
ト。臣等請フ又之ヲ辨ゼン。夫レ輕々進歩ト云フ
者、固ヨリ臣等ノ解セザル所ナリ。若シ果テ事會
卒ニ出ル者ヲ以テ輕々進歩トスルカ、民選議院

テ水尽山起
ルナド、云

ナル者ハ、以テ事ヲ鄭重ニスル所ノ者ナリ。各省
不和ニシテ、變更ノ際、事本末緩急ノ序ヲ失シ、彼
此ノ施設相視セサル者ヲ以テ、輕々進歩トスル
カ。是レ國ニ定律ナク、有司任意放行スレバナリ。
此ノ二者アラバ、則適ニ其民選議院ノ立テズン
バアル可ラザル所以ヲ證スルヲ見ルノミ。夫レ
進歩ナル者ハ、天下ノ至美ナリ、事々物々進歩セ
ザルベカラズ。然ラバ、則有司亦必ず進歩ノ二字
ヲ罪スル能ハズ。其罪スル所必ず輕々ノ二字ニ
止ラン。輕々ノ二字、民選議院ト曾テ相關涉セザ

ルナリ。尚早キノ二字、民選議院ヲ立ルニ於ル、臣
等當ニ之ヲ解セザルノミナラズ、臣等ノ見正ニ
之ト相反ス。如何トナレバ、今日民選議院ヲ立ツ
ルモ、尚ホ恐クハ歲月ノ久シキヲ待チ、而シテ後
始テ其十分完備ヲ期スルニ至ラン。故ニ臣等一
日モ唯其立ツトノ晚キヲ恐ル。故ニ曰ク臣等唯
其反對ヲ見ルノミト、有司ノ說又云フ、歐米各國
今日ノ議院ナル者ハ、一朝一夕ニ設立セシノ議
院ニ非ズ。其進歩ノ漸ヲ以テ之ヲ致セシ者ノミ。
故ニ我今日俄ニ之ヲ摸スルヲ得ズト、夫レ進歩

ノ漸ヲ以テ之ヲ致セシ者。豈獨リ議院ノミナラ
ニヤ。凡百學問技術機械皆然ルナリ。然ニ彼レ數
百年ノ久シキヲ積デ之ヲ致セシ者ハ。蓋シ前ニ
成規ナク。皆自ラ之ヲ經驗發明セシ者ナレバナ
リ。今我レ其ノ成規ヲ擇テ之ヲ取ラバ。何ゾ企テ
及ブ可ラザランヤ。若シ我自ラ蒸氣ノ理ヲ發明
スルヲ待。然ル後我始テ蒸氣機械ヲ用ルヲ得ベ
ク。電氣ノ理ヲ發明スルヲ待。然ル後我始テ電信
ノ線ヲ架スルヲ得ベキトスルカ。政府ハ應ニ手
ヲ下スノ事ナカル可シ。臣等既ニ己ニ今日我國

則有司ノ云々
回護ノ筆
法用ウ妙

民選議院ヲ立テザルベカラ所以。及ビ今日我國
人民進歩ノ度。能ク斯ノ議院ヲ立ツルニ堪ユル
ヲ辨論スル者ハ。則有司ノ之ヲ拒ム者ヲシテ。
口ニ藉スル所ナカラシメント欲スルニ非ズ。斯
ノ議院ヲ立ツル者ハ。天下ノ真理ヲ伸張シ。人民
ノ公論通義ヲ立テ。天下ノ元氣ヲ鼓舞シ。以テ上
下親近シ。君臣相愛シ。我帝國ヲ維持振起シ。幸福
安全ヲ保護セン。ヲ欲スレバナリ。願クハ幸ニ
之ヲ擇ヒ給ハニ。トテ。

位階並歲俸條例ノ議 伊地知正治

謹嚴体ヲ得
 タリ大臣ノ
 奏議宜ク此
 ノ如クナル
 ベシ前篇則
 島公等建議
 文章議論併
 ニ其妙ヲ得
 タリト雖モ
 書生咄々人
 ニ迫ルノ氣
 像アリ大人
 君子ノ口吻
 ニ似ズ

位階ハ人品ノ尊卑ヲ表シ、席次ヲ列シ、之カ寵賞
 ヲ示ス所以ハモハナリ。然シテ人或ハ視テ虚譽
 トス。夫ハ官職ニアリテハ、高下各其月俸ヲ給與
 ス。奉職者自ラ以テ榮且幸トシ。世人亦以貴シト
 ス。是他ナシ營祿ハ實アレバナリ。維新以來、官制
 改定、較備ルト雖モ、位階ハ只其名存シテ、其實無
 用ニ歸スルガ如シ。是レ今日ノ弊ト謂ハザルヲ
 得ズ。且夫ノ官職ニ昇リ、進シテ許多ノ俸ヲ享ル
 ヤ、榮ハ則榮ナリ、一タビ罷免ノ日ニ至レバ、俸々
 タル匱乏無産ノ土民トナル。故ニ在職中ト雖モ、

抑ノ字用得
 佳

豫メ後計ヲ爲サ、ルヲ得ズ。抑官員ノ私利ヲ營
 ムヲ禁シ、廉節ヲ守ラシメ、專心精勵、孳々トシテ
 勉強セシメント欲スレバ、其終身ヲ安シ子孫ヲ
 保育スルハ餘裕アラシムベシ。皇朝中古ノ法職
 アル者ニ職分田ヲ給シ、其功アル者ニ功田ヲ給
 シテ、更ニ位アル者ニ位祿位田ヲ給ス。蓋シ位階
 其意ヲ虚譽トナサズ、人々ヲシテ之ニ進叙スル
 ヲ榮幸トシ、益以テ其職務ヲ勉励セシメン事ヲ
 要スルニアリ。西洋諸國ノ官制、此ニ見ル所アリ。
 停年増給ノ法アリテ、其年勞ヲ費シ、免職養老金

ヲ給ス。優侍ノ道、勤勵ノ意、東西符ヲ同ウス。今ヤ皇朝位祿位田ノ制、西洋増給養ノ法等、交互斟酌シテ、今後ノ制規ヲ設ケ、風俗敦厚ナラシムンニテ、期望ス。此レ獨リ位階ノ虚譽トナラザル而已ニアラザルナリ。依テ位階并歳俸表條例等ヲ撰ンデ、委細別箋ニ具シ、謹テ高裁ヲ仰グ。某月某日議長伊地知正治謹言

歐洲ヨリ歸リ言ヲ述ル書

木戸孝允

某才識謏劣、學問空疎而シテ、叨ニ要路ニ當ル。惶

議論沈實地
ヲ露セズ陸
宜公ノ奏義
ニ似タリ

一句是一篇
ノ主意

悚ニ勝ヘス。曩者使ヲ歐洲各國ニ奉ズ、專對其當
ヲ得ル能ハズ。上以テ朝廷ノ特旨ニ稱ハズ、下以
テ人民ノ政望ニ副セズ。其罪寔ニ少トセズ。然リ
而シテ、經歷ノ際、其制度文物ヲ視、其沿革ノ由ル
所ヲ察シ、其風土民情ニ就テ、其異同ノ岐ハ所ヲ
觀、之ヲ我邦維新前後ノ事體ニ較シ、其施設措置
ハ得失ヲ熟思スルニ、則各國事蹟ノ大小、文鄙ハ
異アリト雖、其廢興存亡スル所以ハ者ヲ察ス、
ルニ、政規典則ノ隆替如何ニ在ル耳。因テ惟ニ縱
令土壤廣大、人民蕃殖スルモ、苟モ政規典則アリ、

以テ之ヲ約束スル能ハザレバ、則一夫或ハ鄙悒
以テ私利ヲ徇ヘ、一夫或ハ驕傲以テ公道ヲ矯ム。
而シテ諂諛僥倖齟齬ノ徒、夤緣朝樞ニ布滿、大富
強文明ノ外貌アリト雖、終ニ國基衰頽復整頓
ス可カラザルニ至ルヲ免レズ。尙鑒遠カラズ、歐
州勃亞蘭度ノ顛覆ノ如キ是ナリ。彼レ獨立全存
ノ時ニ當テ、土壤廣、人民衆、暴君汗吏アルニ非ズ。
然ルニ時勢ノ變遷ニ際シ、政規ヲ確立スル能ハ
ズ、甲者自信智ト謂ヒ、乙者自負能ト稱シ、彼是相
猜ヒ、相服從セズ。公侯豪族、各私利ヲ營ミ、公道ヲ

矯メ、相争ヒ相軋リ、殆ト無政ノ國ノ如シ。人民困
難此ニ至テ極ル、孰カ活路ヲ計ヒ、極濟ヲ望マザ
ランヤ、既ニシテ舉國蠶起、怨ヲ公侯ニ修ム、讐ヲ
豪族ニ復ス、其騷擾紛乱、遂ニ魯普墾三國、生民塗
炭坐視ニ忍ビズ、兵ヲ舉ゲ罪ヲ問ヒ、卒ニ殘賊ヲ
懲戮シ、其土ヲ三分シ其國ヲ滅スニ至ル嗟亦哀
ム可キカナ。其亡國ノ民將タ誰ヲ是レ咎メ、誰ヲ
是レ怨ンヤ。是佗ナシ國獨立ノ實績ナク、人固有
ノ權利ヲ失ニ由ルノミ。其向ニ瀛車ニ駕シ、普ヨ
リ魯ニ之ク、一朝悲笳耳ニ徹ス、殘夢忽破ル。起テ

瀛車云々情
致凄然人ヲ
動カスニ足
ルト雖氏文

氣頗ル或弱
ニ墮ルヲ覺
フ

一段收得善
嗚呼ノ字苟
モセズ

玻黎牕ヲ推ス。乃教亞人ノ錢ヲ旅客ニ丐ヲ觀ル
ナリ。因テ其盛時ヲ想ヒ、垂淚禁ヘス之ヲ久ウス。
嗚呼政規建立セズ。典則確存セズ。何ノ國カ此ノ
覆徹ヲ踏マザランヤ。夫レ廢興存亡ノ機此ノ如
ク急且驗アレバ、則安ゾ録シテ以テ之ヲ諸公ニ
質サバルヲ得ンヤ。之ヲ譬ニ一枝ノ策強ト雖也。
三尺童子猶能ク之ヲ折ル。十枝ノ策弱ト雖也。束
テ之ヲ約ス。則壯夫挫グ能ハズ。又以テ千斤ノ重
ヲ任ズ可キ也。今一國ヲ割リ數小主ヲ置キ、之ヲ
シテ各區ヲ宰制セバ、則方嚮多門。各其利ヲ營ミ、

其欲ヲ逞ウス。國力分裂。復收拾ス可カラザルナ
リ。若シ夫ノ牆内兄弟ノ如キハ、其強弱智愚亦判
ス可モ烏ソ一和協合ノ外國ト對峙シ、之ト犄角
ノ勢ヲ制ス可ケンヤ。倘シ其道ニ反シ、一主群小
主ヲ總轄シ、方嚮ヲ一途ニ歸シ、利害ヲ一轍ニ通
ジ。以テ全國ヲ統御セバ、則疆壤廣シト雖也。人民
衆シト雖也。決シテ此ノ紛擾ヲ為スニ至ラス。顧
ニ外國ノ侮慢ヲ防過スルニ足ラン。是物理ノ當
ニ然ルヘキナリ。某一人ノ言ニ非ズ、五州強國ノ
通論ナリ。我邦往日時世ノ變更ニ際シ、士民其途

巷杜云千戈
 不見老萊衣
 歎息人間萬
 事非今古兵
 亂之際人民
 流離困頓
 情景一般相
 似タリ兵ハ
 凶器ト信ナ
 ル哉

ヲ失ヒ、相率テ貧困ニ陥ル者亦尠ト為サズ、京畿
 北陸諸役ニ至リ、徃々塗炭ノ歎ヲ免レズ、今一家
 ノ厄ニ就テ之ヲ言ハシ、父京城ノ難ニ殉ヒ、子北
 陸ノ事ニ死ス、孰カ君恩ニ報ルアラザランヤ、然
 ニ一家ノ厄私情ナリ、一國ノ變公事ナリ、王事監
 キ靡シ豈私情ヲ顧ルニ暇アラシヤ、是ヲ以テ咸
 克ク股肱ノカヲ盡シ、研心窮慮終ニ朝廷政規ノ
 鴻基ヲ成ス、然リ而シテ諸制變革、凡ソ人ノ耳目
 ニ觸ル者、事トシテ前日習慣ニ反セサルナシ、是
 ニ於テ狐疑ヲ抱キ或ハ割據ヲ謀リ殆ンド朝意

ノ嚮ヲ所ヲ知ラザルニ似タリ、噫嘻、聖裁萬機、豈
 徒ニ變更ヲ事トセシヤ、首トシテ内國形勢ヲ察
 シ、次ニ外國關涉ヲ顧ミ、其設施ニ已ヲ獲ザル
 ニ出ザル者ナシ、是ヲ以テ富强ヲ振興シ、文明ヲ
 夾隆シ、以テ斯民ヲシテ其堵ヲ安セシム、向者戊
 辰ノ春、東北未ダ平定セザルノ際、百官有司及諸
 侯伯ヲ闕下ニ集メ、皇上躬親ラ天神地祇ニ祈リ、
 誓言五條ヲ制シ、之ヲ天下ニ頒ツ、是朝意ノ歸著
 スル所ヲ照示シ、万民ノ方嚮ヲ一定スル所以ナ
 リ、其題言載テ大ニ國是ヲ定メ、制度規律ヲ立テ、

斯誓言ヲ以テ之ヲ天語ニ據ルト為ス。是ニ於テ
遂ニ諸藩還籍ノ請ヲ允シ、侯伯ヲ廢シ、而シテ國
カヲ統一ス。是レ豈五州強國ノ通論ニ取ルアル
ニ非ズヤ。然ラバ則是レ此ノ五條寔ニ我邦ノ政
規典則タル知ル可シ。夫レ政規ハ一國ノ是トス
ル所ニ憑リ以テ之ヲ定ム。百官百司ノ臆見ニ從
ヒ妄ニ軒輊ヲ為スル得ザルナリ。天下細大事務
此ヲ以テ處置ノ準則ヲ為ス。其慮ル所ノ深キ期
ス所ノ遠キ。億兆士民、誰カ敢テ宸衷ノ隆渥ヲ感
戴奉承セガラシヤ。但文明ノ國、君主擅制ヲ得ス。

闔國人民、一致協合、共ニ其意ヲ致シ、以テ國務ヲ
條列シ、而シテ後其裁判ノ課シ、之ヲ一局ニ委託
シ、名テ政府ト謂フ。有司ヲシテ各其事ニ當ラシ
ム、有司タル者、亦各一致協合、民意ヲ保全シ、重ク
其躬ヲ責ム。國務ニ從事ス、非常ノ變ニ遭ト雖凡
民意ノ與スル所ニ非レハ、則敢テ措置ヲ縱ニス
ルヲ得ス。政府ノ嚴密斯ノ如キナリ、而シテ人民
猶能ク其超制ヲ戒ルヲ得、議者猶能ク事ニ就キ
查檢有司ノ臆斷ヲ抑制スルヲ得、此レ其政治最
モ美ナル所以ナリ。若シ夫レ人民未タ文明ノ化

以上政規典則ノ欠ク可カラザルヲ論ジ以下政

ニ決洽ヒザル如キハ、則暫ク君主ノ英斷ニ依リ、以テ民意ノ協合スル所ヲ逆ヘ、而シテ國務ヲ條列シ、其裁判ヲ有司ニ課シ、以テ漸ク之ヲ文明ノ域ニ導ク。是自然ノ理ナリ、竊ニ惟フ、曩者誓言盛舉、敵慮ノ主トスル所、蓋シ其レ此ニ基シカ、然ラハ則我邦未タ議士アリ事々查檢ヲ加フルノ舉アルニ至ラスト雖、詔令ノ綦重、事務ノ遠大、歐米各國ノ民意ヲ體シ、政令ヲ布ク者ト、毫殊異ナケレバ、則有司タル者重ク其躬ヲ責メ、五条政規ヲ奉シテ標準ト為シ、政府ノ務ニ從事勉勵セサ

規典則ノ速ニ立テザル可カラザルヲ論ズ此大是一篇ノ大段落ニシテ通接

ル可ケンヤ。夫レ政規者精神ナリ、百官者支體ナリ、歐洲通説ニ云、政規者精神ナリ、百官者支體ナリ、又云、人民ヲ以テ精神ト為シ、百官ヲ以テ支體ト為ス、蓋シ政規即人民ニ對シ、百官即人民ニ對シ、則ニ政規異ナリト雖、其理則一意若シ夫レ神心命ヲ傳ヘ、而シテ肢體應セス、或ハ命ヲ俟タズシテ妄動スルゴトキハ、則全國事務、雜錯紛亂、而シテ物情安カラズ、其勢將ニ測スベカラザルニ至ラントス、設シ果テ此ノ如クナレバ、則前日ノ盛舉、徒ニ舊制ヲ廢スルニ過ギズ、而シテ士民焦心粉骨ノ功、亦空ク水泡ニ歸センノミ、凡ソ天下ノ事之ヲ言フ太ダ易ク、而シテ之ヲ行フ太

今禮名家文少集一
廿
ダ、難シ。用舎ノ間實ニ深戒ヲ加ヘザルベカラズ。恭ク惟ニ前日詔旨。天下ヲ以テ皇家ノ私有トナサズ。民ト偕ニ居リ。民ト偕ニ守ルヲ誓フ。夫レ天下ノ事務一トシテ天下ノ人民ニ關涉セザルナケレバ。則天下ノ人民亦自カラ天下ノ人民ノ盡ス可キ務メアリ。豈只循々然朝命ヲ聞テ奔走シ。意ヲ受テ升降スルノミニニシテ可ナランヤ。某佛國ニ在リ之ヲ其學士某ニ聞ク。曰佛國人民ハ英國人民ニ如カズ。是誠ニ嘆ス可キナリ。其故何ゾヤ。英國人民。率ネ皆政府與フル所ノ權利ヲ盡サハ

ル者ナシ。佛國人民ハ。則其與フル所ノ權利未ダ其半ヲ盡ス能ハズ。而シテ其未ダ與ヘザル所ノ者ヲ横奪セント欲スル者多シ。其屢紛亂ヲ致シ。而シテ國力競ハザル者。職トシテ此ニ之レ由ル。豈慨歎ニ堪ユ可ンヤ。某之ヲ聞キ爽然自ラ失ヒ。赧然自ラ愧ヅ。夫レ權利ヲ盡シ。而シテ天賦ノ自由ヲ保チ。負擔ニ任シ。而シテ一國ノ公事ニ供ス。是天下ノ人民ノ為ス可キ者ニシテ盡サバ。ルヲ得ザル者タレバ。則其條目ヲ細記シ。盟約ヲ立テ。制度ヲ定メ。相誠テ以テ茲ニ從事ス。是則予典則ナ

リ。夫レ典則者政規ヨリ出テ、而シテ政規即萬機ノ本根、一切枝葉、悉ク由テ以テ分派セザル者ナシ。是ヲ以テ歐洲各國其政規ヲ變革セント欲スルヤ、精思熟慮、遍ク人民ノ意見ヲ悉シ、萬己ヲ獲ガルノ事實アルニ非ザレバ、則決シテ輕舉妄作セザルナリ。是故ニ君主英斷人民ノ嚮フ所ヲ逆ヒ、以テ政ヲ立テ、之ヲ國ニ本ヅク、最モ慎密ヲ加ヘ、特ニ内國ノ狀態ヲ審考シ、廣ク人民ノ生産ヲ視察シ、其開化ノ度ニ應シ、以テ善ク施設スルヲ要トス。且夫レ一國ヲ經理スル必ズ一國ノカハ

文章一段ノ内兩意ヲ帶ルモノ歐文往々之アリ山陽外史其妙ヲ稱ス此篇亦時トニテ之アリ此処且夫レノ字ヲ以テ一段ノ委曲ヲ詳畫スル如キ殆ンド歐文ヲ學ブニ似タリト雖モ恐クハ此公學ニテ然ルニ非ズ蓋シ然ヲ期セズニテ然ルナラン

リ。苟モ其カヲ計ラズ、而シテ事ヲ處セバ、則一利變ジテ百害ヲ成ス。譬ヘバ貧人ハ子弟千金ハ子ヲ羨ガ如シ。産ヲ傾ケ家ヲ喪フニ至ルモ、其榮卒ニ企テ得可キニ非ズ。國事ヲ理スル者亦手ヲ下ス、宜ク其序ヲ繹スベシ。カヲ養フ宜ク其漸ニ從ハヘシ。文明ハ治固ヨリ一朝ハ猝ニ求人幸ニ得可キ所ニ非ルナリ。凡ソ五州ノ廣キ國アレハ斯ニ民アリ、其風土ノ開化ト不開化ヲ論セス、人各賢愚アリ、富亦大小アリ、其賢才ニシテ事務ニ達スル者必ス要路ニ當リ生民ヲ率ユベシ、其富貴

好訥然ニ文
字浮華六朝
氣習ヲ帶フ
ルニ似タリ

ニシテ資財ニ厚キ者ハ、必ズ生産ヲ督シ貧民ヲ
濟フベシ。是普通ノ公理ナリ。然ニ諺ニ之レアリ。
一燕ノ來ル未ダ遽ニ天下ノ春ト謂フ可カラサ
ルナリ。煙霞澹蕩、百花爛熳、而シテ後始テ共ニ陽
和青春ト稱ス可キナリ。民間偶一二賢才ヲ出シ、
數名ノ豪富ヲ得ルモ、一般ノ民、仍ホ貧且愚。又品
位賤劣ノ地ニ在レバ、則其國未ダ富强文明ノ域
ニ入ト謂フ可カラサルナリ。我邦現今ノ景況ニ
就テ、其施設措置ノ跡ヲ察スルニ時勢猶ホ遠逝
タルゴトシ。人心亦偏執固滯、未ダ能ク其權利ヲ

盡ス能ハス。徒ニ其開化ヲ擬シ、未タ曾テ負擔ニ
任セズ。妄ニ富强ヲ希フ。是漫ニ文明ノ弊ヲ摸ス
ト謂フ可シ。是ヲ以テ其外貌、漸々閑都ノ風ヲ習
ヒ、往々朴野ノ陋ヲ脱ス。然ト雖モ其中情未ダ曾
テ文明ノ点ニ赴カス。况ヤ又法令輕出、昨是今非、
朝更暮改。前者未タ行ナハレズ、而シテ後ハ既ニ
踵ヲ躡ス。時體此ハ如シ。民情固ヨリ服スル所ニ
非ス。而シテ政務多端、區域際ナシ。人民ハ機宜日
ニ一日ヨリ進マザルナケレバ、則政府今日ノ事、
豈戊辰年間ノ事ト其轍ヲ同クシテ論スベケン

ヤ。因テ想ニ今日政規仍ホ前日ノ五條ヲ奉ジテ
標準ト為セバ。則當路ノ者毎ニ應變ノ處置ニ迷
ヒ。恐クハ民意ニ慊キ能ハザル可シ。然ラバ則今
日ノ急務ハ。先ツ大令ヲ頒ツニ如クモノ莫シ。向
ノ五條ニ就キ。數款ヲ増加シ。典則ヲ建テ而シテ
後患ヲ防キ。務テ生民ヲ教育シ。其ヲシテ品位賤
劣ノ地ヲ出テ。以テ全國大成ヲ期セシムナリ。人
民品位既ニ高ク。則有司方ニ且ツ其際ニ衆ジ。心
ヲ國家ニ盡セバ。則將來洪福勝ユ可カラザラン
トス。之ニ及シテ大成ヲ要セズ。而シテ一二賢明

一己ノ利達ニ拘ヒ。民意ノ向背ヲ問ハズ。政府ノ
樞要ニ據リ。威權ノ大柄ヲ持シ。功名ヲ之レ圖リ
名譽ヲ之レ營ミ。萬緒國務。每事文明各國ニ擬似
セント欲シ。而シテ輕舉躁行至ラザル所ナケレ
バ。則國歩ノ艱難。恐クハ累卵ノ危ニ及ハン。而シ
テ某輩亦從テ天下人民ノ責ヲ免ル可カラザル
ナリ。是某此言ヲ述ヘ。政規典則ヲ建ルヲ以テ今
日ノ急務トナス所以ナリ。又嘗テ聞ク羅馬古語。
曰。民アレバ則法アリト。然ラハ則政規典則並ビ
缺ク可カラザルナリ。某歐亞ヲ一周シ。觸目經驗

今體名家文抄卷一
ハ際。既往ニ深省シ。竊ニ將來ニ虞ル者アリ。區々
ハ心自カテ緘黙スル能ハス。所見ヲ具陳シ。以テ
之ヲ諸公ニ質ス。願クハ諸公ハ幸ニ之ヲ裁制セ
ントヲ

盲啞學校ヲ創建セシヨヲ乞フ書

山尾庸三

今般工學寮ヲ開カレ。臣庸三其頭ニ任セラレ。誠
ニ以テ天恩隆渥。臣才疎ニシテ識淺ク大任ヲ受
ケ恐懼至ル所ヲ知ラズ。然ニ聖旨ノ忝キ敢テ辭
スベキニ非ス。之ニ因テ廣ク。西洋各國ノ方式ヲ

取捨シ。前途盛大ノ目的ヲ立テ。校中ノ規則。事務
ノ章程等。追逐奉伺セント欲ス。然リ而シテ臣又
熟思スルニ天下ノ廣キ。盲啞癡疾ノ窮民。其幾許
ナルヲ知ラス。爾來是等ノ窮民。自カラ存スル能
ハズ。樂歲幸ニ佗人ノ救恤ヲ仰キ。僅ニ其口ヲ糊
スルト雖也。凶年飢歲又往々凍餒ノ死ヲ免カレ
ズ。真ニ愍然ノ至ニ堪ヘザル也。彼西洋各國ノ如
キハ然ラズ。盲聾瘖啞只其救恤ノ方法。治ク相及
ブノミナラス。又之ヲ學校ニ入レ。文字算數工藝
技術。各其適宜ノ教導ヲ施シ。各其學ニ勉強從事

議論辨古ヲ
費弁て親視
ノ談話累言
ヲ以テス此
一段頗ル情
致アリ

均是云々
合大ニ能文
ヲ知ル者ニ
非レバ此ノ

ヤシム。故ニ其熟練ニ及ブヤ。盲啞學生ヨリ。往々
大家先生ヲ現出シ。名譽ヲ世界ニ得ル者之アリ。
臣曾テ英國ニ在テ造船所ニ入り。修學中親シク
圖引大工鍛冶中ニ。啞者アルヲ見ル。而シテ其人
ト談話應接スル。皆其指頭ヲ發轉シ。字形ヲ摸作
シ。敏捷驚ク可ク。曾テ苦澁ノ態ヲ見ス。而シテ其
技藝ノ精妙。又容易ニ及ヒ易スカラザル者アリ。
是侘ナシ。只教育其法ヲ得ルニ在テ。亦以テ西國
文教隆盛ノ光景ヲ推知ス可シ。均是盲啞也。彼ハ
或ハ良工ト為リ。大家先生ト為リ。此ハ巧人ト為

收束ヲ成ス
能ハズ妙々

リ。餓鬼ト為ル。豈ニ皇國ハ欠典ニシテ人民ハ不
幸ナラズヤ。故ニ今西洋各國ノ式ニ倣ヒ。先ツ盲
啞學ノ二校ヲ創建シ。一校毎ニ男女ノ二局ヲ分
チ。教師ヲ外國ヨリ招キ。以テ天下ノ盲啞ヲ教導
シ。適宜ノ工藝ヲ授與シ。其成立ニ從ヒ。盲男盲女。
啞女啞男。各其適意ニ相婚嫁スルヲ許シ。天然ノ
倫理ヲ全ウシ。又漸ヲ以テ其他各種廢疾ノ窮民
ニ及ボサバ。數年ヲ出スシテ。西洋各國ノ美ニ及
ブ可キカ。是唯無用ヲ轉シテ有用ト為シ。國家經
濟ノ萬一ヲ裨補スルノミナラス。廢人亦各其力

今昔名賢言行録
ニ食ミ世上ノ良民ト共ニ自主ノ權利ヲ得。以テ
朝廷至仁ノ恩澤ニ沾ハントス。臣希望懇願ノ至
ニ任ルナシ。某年某月日工學頭臣山尾庸三恐懼
謹言

農業三事ヲ上ルノ書 津田 仙

仙辱ク澳國維納府博覽會へ差遣サレ。彼國ニ於
テ萬國審査官ノ列ニ舉ラレ。其際澳國有名ノ農
學師荷衣伯連氏ニ親炙シ。同氏近時發明ノ三大
法。仙幸ニ其大畧ヲ領スルノ機會ヲ得タリ。抑同
氏數十年來。黽勉積學ノ力ヲ以テ。前賢未發ノ妙

理ヲ發明シ。其邦國ニ大利アリ。人民ニ鴻益アル
ヲ。農學場中へ一大功德ヲ布ク者ト云可シ。右三
大法ノ第一ハ、^アトモスヒ^トリク^クパイ^プ 氣筒ト
云フ義
ト稱ス。磚製ノ筒ヲ地中へ瘞通シ。大氣ヲ土中へ
吸入セシメ。地質ヲ肥饒輕鬆ナラシメ。以テ植物
ノ生育ヲ助ク。夫レ草木ノ糞ヲ吸收スル。亦大氣
ノ功用ヲ仰ガザルヲ得ズ。然ニ尋常大氣ノ地内
へ滲入セララル。凡一尺五寸ヨリ深キニ及バズ。
今此筒ヲ設ケ大氣ノ侵入ヲ促ガス。故ニ深淺自
在ニ糞料ノ養ヒヲ達スルヲ得。以テ耕鋤ノ勞ヲ

省カシム。第二ハ「インクリ子」樹枝ヲト稱ス。樹
曲ル義枝ヲ偃曲シテ本幹ノ勢力ヲ増大ナラシム。夫レ
根吸入スル所ノ瓦斯ハ、幹ヨリ枝端ニ通達シ、葉
底ヨリ吸收スル炭素ト配合シ、其用ヲ成ス者ナ
リ。今此偃曲法ニ依テ已ニ吸藏スル所ノ養分ヲ
以テ、或ハ幹ヲ張大セシメ、或ハ花實ヲ増殖セシ
メ、或ハ枝葉ヲ繁茂セシム。皆人意ノ欲スル所ノ
如クナラザルナシ。恰モ人エヲ以テ草木ハ命ヲ
支配スルニ異ナラズ。第三ハ「アルチフシアル」
コンデーシヨンセ人エヲ以テ豊熟ト稱へ。果實ノ増

熟ヲ助ルノ法ナリ。蓋シ花辨開放ノ時ニ臨ンテ、
隨意ニ花粉ハ配合ヲ媒助シ、結果ヲシテ大且ツ
多カラシム。之ヲ穀類ニ施コセバ、其粒愈大ニシ
テ、其量愈重ク、其收穫亦愈多シ。仙維納府外ノ麥
圃ニ於テ、荷氏及ビ博覽會、一等事務官、田中芳男
ト共ニ、此法ヲ設置シ、麥ノ期ニ至リ、尋常成熟
ノ麥ト比較セシニ、果テ倍量ヲ得タリ。仙又同府
ニ於テ、一葡萄樹ヲ以テ試験セシニ、一根樹前六年
植タル者ニシテ、其果ヲ結ブ、三百三十餘把ヲ
得タリ。荷氏ト共ニ、之ヲ博覽會果實列品場へ携

へシニ、看者皆其培養ノ驗アルヲ駭嘆セザルナ
 シ。加之本年七月、適佛國ノ新紙ヲ閱スルニ、去年
 葡萄酒五瓶ヲ得タル樹ヲ以テ、此法ヲ試ル者ア
 リシニ、今年所得ノ酒一百五瓶ニ至レリト載タ
 リ。是等即其明驗ニアラズ耶。夫レ古ヨリ西邦碩
 學名譽ノ士、異代競テ學藝ノ進歩ヲ助ケ、經世濟
 民、天地ノ數歩、物理ノ學ヨリ百工技藝ノ末ニ至
 ル迄、皆其精奧ヲ究メザルナシ。抑瀲力電信醫手
 化學ノ如キニ至テハ、其生民ニ洪福利益ヲ與ル
 至大至廣。殆ンド文物昌明ノ極ト謂フ可シ。獨農

此一段灼爛
 觀ルベシ是
 ナケレバ文
 フ成サス殆
 シド天機ヲ
 洩ス造化ノ
 エヲ奪フ云
 々尤モ其筆
 カノ餘リア
 ルヲ見ル

務ノ一課ニ至テハ、僅ニ簡便ノ機械方術等、先哲
 ノ裨補無キニ非ト雖モ、其地價ニ關スルニ及ン
 デハ、古今曾テ特別ノ差等アルヲ聞カズ。況ンヤ、
 天然ノ配合ヲ媒妁シ、天造ハ榮枯増減ヲ資クル
 カヤ、嗚呼荷氏ハ三大發明ヨリ、有限ハ人カ有限
 ハ土地ヲシテ、皆限界ナカラシム。是ニ由テ之ヲ
 視レバ、荷氏獨農場中ニ大功德ヲ敷クハ、ニテ
 ラズ。殆ンド天機ヲ人間ニ洩シ、造化ハエヲ奪フ
 ト云フモ可ナリ。今之ヲ桑、茶、米、麥、山林、果樹等ニ
 施サバ、其鴻益量ル可カラズ。仙願クハ今此法ヲ

結末恨ムラ
ノハ農業三
事ヲ上ル書
体ヲ失フ益
此公々煉ノ
如

天下ニ播傳セバ、數年ヲ出スシテ、上ハ政府ノ歲
入ヲ増加シ、下ハ生民ノ家産ヲ培植シ、貴賤天與
ノ幸福ヲ仰ンテ、因テ仙令、荷氏口授スル所ノ
三法ヲ筆述シ、普子ク世人ノ觀覽ニ供シ、共ニ天
下ノ洪益ヲ謀ラント欲ス、仙恐懼敬白
木戸參議ニ上ルノ書、禮之
辱知生何禮之謹テ書ヲ木戸參議公閣下ニ呈ス、
伏テ惟ルニ往年我全權大使ノ歐米各國ヲ歷聘
スルヤ、驂ヲ華盛頓府ニ駐メシテ數月、此際ニ方
リ、閣下適ニ法律學士、サニユール、テイロル氏ノ

老練先生ノ
談話叙得明
了今日新聞
授書家ノ政
談ト少く徑
應アルガ如
シ

著名ナルヲ聞キ、禮之ヲ具シテ面晤シ、泰西法律
ノ大要ヲ質問ス、テイロル氏曰ク、今日歐米各國
ハ治化休明、數百年ノ培養ヲ經テ、成長セル者ニ
テ、一朝ハ造為ニ出ルニアラス、其之ヲ誘掖セシ
根柢ハ、先哲著作ナリ、著作固ヨリ其人ニ乏シカ
ラズト雖、就中道理事蹟ニ兼通シテ、典型模範
ト爲ス可キ者、孟德斯鳩ヲ以テ古今第一トス、聞
ク貴國法ハ各國ニ採リテ、勵精治ヲ圖ルト、果シ
テ然ラバ宜ク孟氏ノ法論ヲ玩味シ、其蘊奧ヲ究
メ、世道人心ハ苟モ改換ス可ラザル事ヲ不解セ

書紳柳揚方
度分アリ

ハ。乃經世濟民ノ為ノ大ニ裨益スル所アリト。閣下其言ヲ聽トシ。禮之ヲシテ府下ノ書肆ヲ搜索セシメ。此原本ヲ購得ス。行李ト俱ニ携帶シテ。朝夕手卷ヲ釋カズ。歸朝ノ後公暇ヲ以テ。之ヲ重譯シ。閣下ノ電覽ニ供セント欲ス。會病ニ罹リ。其志ヲ果サズ。客歲始テ其稿ヲ起シ。既ニ前編ノ大半ヲ卒ル。抑モ此書ノ成ルヤ。實ニ閣下ニ淵源ス。故ニ今之ヲ閣下ニ進呈シテ。公明ノ鑒識ヲ仰ガザルヲ得ズ。其翻譯行文ノ拙劣ハ。固ヨリ言ヲ待カト。雖モ。其立論ノ簡要。皆テイロル氏所說ハ如

シ。若シ能ク。庶堂樞機ハ餘。覽觀ヲ賜ヒ。謀猷ハ一助ト爲カバ。禮之兩年ハ勞空シカラザルハ。幸ナラズ。亦以微臣。國家ニ報ズル涓埃ハ鄙衷ヲ表スルニ足ハリ。希クハ閣下諒察ヲ加ヘヨ。尊嚴ヲ冒瀆シ。惶懼止ムナシ。明治八年五月何禮之頓首再拜

偶評
今體名家文抄卷之一終

終